

ミュンスター彫刻プロジェクト

17, Sep. 2018 村田 真

- ・ミュンスターは1200年の歴史をもつ古都。第2次大戦で市街地の9割を破壊され、戦後モダンな都市ではなく、昔ながらの街並を再現。そのため旧市街では中世以来の景観が保たれている。
- ・人口は約30万人。うち学生が5万6千人を占める大学都市。また、土地が平坦なため自転車は50万台を数え、自転車都市でもある。
- ・70年代にドイツ・ミュンスター市にジョージ・リッキーらの彫刻が寄贈されたが、抽象的な彫刻のため市民が拒絶し論争を呼ぶ。
- ・州立美術館のクラウス・ブスマンは市民を啓蒙するため、77年にロダン以降の近代彫刻展を企画。1部は近代彫刻、2部は現代彫刻、そして3部が野外彫刻に分かれ、2部と3部をカスパー・ケーニヒが企画。この第3部が彫刻プロジェクトの始まりだが、市民の反発は強かった。
- ・彫刻プロジェクトは以後10年に一度の長いスパンでおこなわれている。これは市民の反発を和らげ、徐々に現代彫刻になじんでもらうためであり、アートの変化を観察するためでもある。
- ・作品は市内に点在し、観客はガイドマップを片手にオリエンテーリングしながら探し歩き、古都ミュンスターの魅力にも気づかされる。
- ・作品の約半数は会期が終われば撤去されるが、残りはそのまま保存されるので、10年ごとに作品は増加していく。だから「彫刻展」ではなく「彫刻プロジェクト」。
- ・以後、街おこしを兼ねたオリエンテーリング方式の野外展や芸術祭が増えていく。日本では、ミュージアム・シティ・天神、越後妻有アートトリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭などが代表的。

- 50s 具体美術協会、公園で野外展、デパート屋上でアドバルーン展など試みる
- 60s ネオダダ、ハイレッドセンターなどが街頭でハプニングを繰り広げる
- 70s 榎倉康二、高山登、原口典之らが自宅などで作品を展示する「点展」
- 77 西ドイツ・ミュンスターで「現代彫刻展」開催、一部は屋外に展示（彫刻プロジェクト）
- 80 浜松市の砂浜で「浜松野外美術展」
- 82 川俣正、日本各地で民家にインスタレーションする「アパートメント・プロジェクト」
- 84 岡山県牛窓町で2年に1度「JAPAN牛窓国際芸術祭」
- 86 ベルギー・アントワープでヤン・フート企画により「シャムブル・ダム」
- 87 第2回ミュンスター彫刻プロジェクト、規模を拡大し、ドクメンタ8と同時期に開催
- 89 ニューヨークの広場に設置されたリチャード・セラの彫刻「傾いた弧」が裁判で敗訴し、撤去
- 90 福岡の街に作品を設置する「ミュージアム・シティ・天神（MCT）」
- 93 銀座の路上で「ザ・ギンブラート」。翌年には歌舞伎町で「新宿少年アート」
- 94 福岡市美術館で第4回アジア美術展開催。MCTとともにコミュニティアートが一堂に
- 95 青山一帯でヤン・フート企画による「水の波紋」と、画廊が中心となった「モルフェ」
- 96 川俣、九州の元炭鉱地に塔を建てる「コールマイン田川」プロジェクト
- 98 ニコラ・ブリオー『関係性の美学』出版、「リレーショナルアート」が浮上
- 99 秋葉原電気街の店頭モニターにビデオアートを流す「秋葉原TV」
- 00 新潟県の里山を舞台に、越後妻有アートトリエンナーレ「大地の芸術祭」
- 06 「大地の芸術祭」で廃屋や廃校をアートで再生する「空家プロジェクト」
- 08 Chim ↑ Pom、広島・原爆ドーム上空に書いた「ヒロシマの空をピカッとさせる」が問題に
- 10 瀬戸内海の島々を舞台にした「瀬戸内国際芸術祭」開始。以後、各地に芸術祭が続々と誕生
- 16 藤田直哉『地域アート—美学／制度／日本』出版、「地域アート」を批判

(草田梓) 08/20/2018